

平成27年河川功労者紹介

少子化・定住化対策に向けた環境保全とリバービジネス

Environment conservation and River-business-

For halting the declining birth rate and promoting settlement of people



日野川流域交流会

た なか けん じ
田中謙次*

Kenji TANAKA

この度、河川功労者（団体）表彰を賜りました。思いがけない励ましのご褒美と喜んでます。何よりも、活動フィールドの河川管理者（福井県知事）の推薦と全国的な審議を経ての受賞に、重みを自覚しています。発足以来18年、一步一步続けていきた活動が流域に根付いた成果だったと振り返り、次への展開に意気込んでいます。

1. 日野川流域交流会の目指す活動

当会は、全国各地で川に学ぶ体験活動が流行りだした1997年（平成9年）に、プロジェクト「サクラマスの駅伝」をスタートさせました。川の駅ネットワーク・HINOリバーサロンを経て、2001年に「日野川流域交流会」として活動が本格化しました。学校・企業・専門家・行政・市民団体など良好なネットワークによって、環境に配慮した川の改良を提案しました。ようやく障害の多かった日野川に再びサクラマスが遡上するようになりました。2007年に日野川観光資源発掘検討会の開催を経て、第二のプロジェクト「日野川に砂礫河原を取りもどす会」がスタートしました。この会では ①砂礫河原をとりもどす再生実験 ②川への関心を広めるイベント「そうだ！川に行こう！」の開催 ③多様な団体の交流による砂礫河原再生への活動を行いました。2012年から筆者らを中心に、企業・商店・飲食店・大学・主婦など多彩な職業の若手経営者や学生などこれまで川活動に無かった顔ぶれが加わり、若い感覚によるリバービジネスをイノベーションするプロジェクト「リバビズ大学」を設立しました。リバーカリキュラムの学習、大学や学部を越えた研究活動、リバーツーリズムの実践「おしゃれなり・BAR」「川TERRACE」など、常に世の中の変化とターゲットを明確にしてビジネス感覚を取り込んだ活

動を目指しています。現在取り組んでいる上流・中流・下流での活動を紹介します。

2. 上流—水源集落との交流

九頭竜川水系日野川の上流高倉谷川沿いの瀬戸集落は、当会発足からの活動サテライトです。そこは19戸の豪雪山村で、私たちは水源集落と呼んでいます。

集落にはアカタン砂防と同じように、住民が探し出した極めて稀な歴史的砂防堰堤が点在しています。住民の多くは高齢者ですが「高倉谷川砂防堰堤の会」をつくり、保全作業を続け来訪者を水源の森へ快く案内しています。遠くに眺める権現山の松明を拝む雨乞い神事も、むらの祭りも途絶えましたが、毎年10月になると道端で



砂防堰堤の落水が心地よく響く水源の森レストラン

* 日野川流域交流会幹事・環境文化研究所最高研究責任者

Producer, Hinogawa Basin Exchange meeting・CRO, Environment Culture Research Inst.

平成27年河川功労者表彰「第4項 河川の自然保護・環境学習・河川愛護等の活動に功績」

トチの実を干す伊藤さんに出会います。80歳の伊藤さんは昔からの方法でトチ餅をつくり、山菜を採って長期に保存する方法を伝えています。近くに縄文集落跡があることから、一万年前から受け継がれてきた日本の暮らしに出会えるような期待があります。住民は豪雪の苦境に耐えて、共有共同の絆で助け合って暮らしています。山で生きる技と体験が豊富だから、高齢と言っても逞しく元気で朗らかです。

夏休み、都市の家族はきれいな高倉谷川で川遊びをしながら、得がたい山の暮らしを体験します。住民は川への通路「かわど」を設け、危険物を取り除いて見守ってくれます。春や秋には水源の森と砂防文化財をめぐるハイキングを行い、おしゃれなカフェ・レストランをつくってランチを楽しみます。積雪時はスノーシューを履いて雪上をハイクします。参加者は都市の家族が多く、殆どがリピーターになります。それは、大昔から受け継いでいる生活の知恵や、自然の恵みとともに生きている山村の暮らしに魅力を感じ、触れてみたい欲求があるからだと思います。福井大学や京都大学アジアアフリカ研究所もサテライトにして交流を続けているのもよく似た思いかもしれません。山と共にきれいな水を守っている水源集落は、川に学ぶ体験活動に最適な場であり、これから先も都市住民にとって意味の深い関係だと思えます。



水源集落で体験する都市の家族

3. 中流—おしゃれな「リ・BAR」

2012年から越前市の日野川河川緑地公園でイベント、おしゃれな『リ・BAR』をオープンしています。この企画は、魅力ある水辺をプラットフォームに、少子化・定住化対策を目指す新しいビジネス活動です。

私たちは、食と農・観光・健康・医療・精神・教育などを資源として、川というパブリック空間にエコノミー性を取り入れたリバービジネスを、日野川から世界へ発信して行きます。田舎人だからこそ田舎でしかできないことを大切にしています。そして、企業・商店・飲食業・学校・行政、経営者・専門家・学生・主婦など多様なビジネスパートナーが集まり、水辺を中心としたビジ

ネスモデルから新しく懐かしい社会づくりを目指していきます。バーを楽しむ要素として音楽があります。サルサとダンスで国境を越えて踊り、ミュージシャンと特別音楽番組で盛り上がり、ジャズを上品に楽しむアダルトなムードに引き込まれる雰囲気です。テーブルマジックや水面を照らす花火など異なるコンセプトで3日間を演出しました。仲間や恋人との時間に笑顔、様々な人たちが思い思いに楽しむことができました。それが「リ・BAR」の魅力です。川大好きな私たちが自然体でちょっとしたおもてなしをするだけで、若者たちが声かけあって集まり共感し合います。外国にでも来たようなおしゃれな空間ができました。水辺というすばらしいフィールドで実践する「リバーツーリズム」は、若者が、田舎が、自然が、これからますます楽しくなる新しい「リバービジネス」なのです。

リ・BARを通じて多くの水辺のファンが生まれました。またいつでも来られるように、そして、流域住民、県外在住者、外国在住者など誰もが訪れたいようになるように、今後は本格的なリバーツーリズムをつくりあげたいです。そして、一つでも多くの職業を創出し、流域が元



河川敷に若者たちが集まり、共感の空間が出現した



DIYのバーカウンターが飛び切りおしゃれな空間を演出

気になることを目指していきます。

当初から実行委員として参加しているBAR経営者は「水辺にお店を開きたい」「真剣に考えている」と発表しました。私たちの活動に成果が出てきました。リバビズ大学の福井工業大学野尻研究室のアンケート結果から、参加者は20から30歳代がほとんどで、若い世代はカフェやレストランでリラックスし散策できる川を望んでいると報告しました。振り返ると3日間だけの大がかりなテント仮設費が課題です。越前市がテント用アンカー工事してくれたのでかなり軽減しましたが、それでも雨天になれば来訪者が減ります。今年は雨天もあって当初の参加数に到達しなかったが、貴重なマーケティングを把握することができました。今回の経験と蓄積しているノウハウを、次へのビジネスプランに生かしていきます。

4. 下流でのミズベリング・バー「川テラス」

まち中を流れる日野川支流の足羽川は、市民の関心が高い川空間です。ここでも四季を通して川に学ぶ体験活動を行っています。今年の11月実験的に期間限定のミズベリング・バー「川TERRACE」をオープンしました。会場にはカフェテーブルとバーカウンターを準備、市内の酒販店がソムリエの接客とともに赤・白・スパークリング・ホットワインやソフトドリンク、ワインに合うおつまみを販売しました。コトコトと路面電車が走る幸橋の下流の石畳堤防で行いました。夕方にはガス灯が灯り、足羽川に沈む夕焼けや水面に映るまちの夜景が楽しみました。夜は肌寒くなりましたが週末5日間の開催で400人以上が訪れました。いずれもFacebookやTwitter、友人からの誘いで訪れました。河川に関わる行政や団体が、企画の手法を学ぼうと全国からも訪れました。20から30歳代が多く、カップルや県外転勤者も楽しんでいました。「日ごろ何もない堤防なので、このような素敵な雰囲気はぜひ続けてほしい。酒類の他コーヒーやスイーツなども提供してほしい」などの声がありました。出店者は予想していた以上の賑わいと売上に驚いていました。最初の実験としては学ぶところが多く、希望が持てる成果でした。



まち明かりが映る足羽川の川TERRACEで佇む

このプロジェクトは「ミズベリング」との連携企画、川好きの若者や学識経験者らがリバービジネスなどの可能性を探る「リバビズ大学in日野川流域交流会」が主催しました。足羽川流域で活動する市民団体、近くの料亭や経済団体の人たちが、国交省福井河川国道事務所が「河川空間を生かせないか」と持ちかけ盛り上がったのが始まりです。「今回は、来年度以降の本格展開に向けた社会実験。官民ともに『おもてなしと観光』が一致したテーマであって、準備時間が無いなか占用許可など自治体の積極的後押しもあって順調に準備が進められた。」また「2011年に河川敷地占用許可準則の一部改正で、国が河川敷地での営業活動を規制緩和する方向にかじを切った。会場敷地を管理する福井市も、中心市街地活性化のホットスポットとして「川TERRACE」を位置付けてくれる。」と説明しています。



川とまちの話題で賑わう足羽川初のミズベリング・バー

5. これからの川空間

どこにでもある風景の日野川でも、水辺をステージに色づけしてみると季節や時間ごとに様々な感情を表現してくれます。味付けはどこでもできると思います。奥深い田舎を流れる川でも、まちの中を流れる川でも、風土に根ざした少々のエッセンスを加えると、待っていたようにおしゃれでかっこいい若者が共鳴し集まってきました。若者たちが集うことで、川の空間が新たな商品となってリバービジネスが生まれてくると思います。私たちの活動が、少子化や定住化問題を笑顔で解決して行く一つの動機になると思い取り組んでいます。